
THE LAST MEMORY ~ 第0使徒風斬レン ~

風斬 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE LAST MEMORY ～第0使徒風斬レン～

【Nコード】

N1570Z

【作者名】

風斬 澪

【あらすじ】

エクソシスト風斬レンは、ノアメモリーが覚醒したため
教団を去る

彼女の運命は如何に！？

第0夜〜別れ〜

あの惨劇から約5年

ドガアンツ！！

何か壊れる音とともにゴーレムから室長、コムイ・リーから通達が入る

通達！通達！ホームの壁が何者かに破壊された模様！

ただちに確認へ向かえ！

「メンドクせ」

そうつぶやいたのは、イノセンス‘六幻’をもつエクソシスト神田ユウだ

面倒だ、と言いながらも指令なのでとりあえず音がした部屋へ

向かう

向かった部屋に住んでいるのは、エクソシスト風斬レンだ

神田が着いたときには、時既に遅し、住人風斬レンの姿も、彼女のイノセンス‘炎乱’も無くなっていた

神田はゴーレムの向こうにいるコムイへ言った

「おい、コムイ」

神田くん？

「壁を壊したヤツがわかった」

それは誰だい？

「多分、レンだろうイノセンスも無くなってる 俺はアイツを追っ」

無茶だよ、神田くん それにどうして彼女が逃げたってわかるのさ

「机の上にメモがあった げんきでね ってな、おまけにさよなら そう書いてある」

…そういうことが、<室長！レンがどこにいるかわかりました！>どこだい！？<崖を降りたトコの森です！>

神田くん！レンちゃんを追って！

「了解、門を開けるコムイ」

急いで！神田くん

「壁、壊してきちゃったけど門から出た方が良かったかな」

ハア、と溜息をつく藍色の髪の少女、彼女の足にはさっきまで傷があつたのだろうか血痕がある

「急がないと、教団の追手がくる」

「オイ」

ふいに背後から聞き覚えのある声に呼び止められた少女は、振り向いて絶句する

「…………げっ！ユウ！？」

彼女を呼び止めたのは神田ユウだ

「レン、お前こんなトコでなにしてる？」

彼女、　　レンは、動揺していたがとりあえず一言

「…ユウに話す必要があるの？」

レンがそうというと神田は自身のイノセンス‘六幻’の切っ先をレンの首にあてた、そして

「なにがあつた？」

と、問うだが、レンは目を伏せ話そうとはしなかった　しばらくたってレンが口を開く

「……………いえない…言えないよ…」

まるで今にも消えてしまいそうなほどか細く、小さな声で言った
よく見ると彼女の頬には涙がつたっている

神田は何かを察したのだろうか、六幻を鞘へおさめた　そして、
神田はレンを抱き寄せた

「!?!?…ユウ？」

「…お前が何をしようと俺の知ったことじゃねえ…だから、話さなくていい」

そう言って神田はレンのことを少し強く抱きしめた

「ユウ…ありがとう」

レンはそういうと、普段見せている笑顔で神田に笑いかけた、まるでもう大丈夫だよ、そう言わんばかりの笑顔で

「ああ」

神田は短くそう返すとレンを離す

「それで？レンお前これからどうするつもりだ？」

「えっと…どうしよう、一日早く出てきたから、何にも考えてない…」

「ハア？一日早くでできた？どうしてだ」

「私は、もう教団に戻ることはないだろうからじゃないかな」

『教団に戻ることはない』そう言ったレンの表情には、寂しさと悲しみが混ざっていた

「なあ、レン」

「何？」

「お前明日まで、一人でココにいるつもりか」

「まあ、明日まで向かえは来ない…かな」

「明日まで、明日までお前のそばにいてやる」

「ハイ？今なんと？」

なぜか、そう言い返すレンの目は点になっている

なぜなら、普通の神田が『そばにいてやる』なんて言葉いうハズがないからだ

「いやいやいやユウ！アンタ本部に戻れ！」

「なんでだ？」

「なんでもなにも アンタエクソシストでしょーが！」

心なしか先程のレンと比べると語気が荒くなった気がしないでもない
こんなやり取りがしばらく続き

「とりあえず、落ち着けレン」

神田のその一言でレンはとりあえず落ち着く、そして、核心に迫る

「なんで？わたしは、裏切り者だよ？」

「裏切り者だが、知ったことかよ お前はお前だろ?」

「!…そうだね」

少しの間レンは黙る そして、空を見上げると『もう、夜か』そ
うつぶやくと野原に寝転がる

すると、レンは突然感嘆の声をもらす

「きれい…」

「レン?どうした」

神田は、レンが寝転んでいるのをみると 同じ様に寝転がった

「すげえな」

レンと神田が見たのは、夜空一面に広がる星 一つ一つ色こそ違
うが夜空に良くはえてとても美しい

「ユウ?」

「なんだよ」

「ありがとう 大好きだよ、ユウ」

「ああ」

「おやすみ…」

「それじゃ、ユウ元気でね　リナちゃんにもよろしく言っといて」

「待て」

歩き出したレンをいきなり呼び止め　何かを投げた

「それ、持っとけ」

あと、
…

神田はレンに耳打ちすると

「わかったな？」

「！！　　うん、わかった」

で、これって“約束”？」

「ああ」

この日を境にレンを見たものはいない

とある一族を除いては
…

第0夜〜別れ〜（後書き）

駄文ですがどうぞよろしく

風斬 レンに質問！

質問ルームにて

「それでは早速質問を始めたいと思いまーす」

「何する気でしょーか」

「質問だよ、質問！では第一問！」

「いきなりですね…」

「身長・体重は？」

「167?・45?です」

「好きなものは？」

「サラダとか野菜類ですかね」

「嫌いなものは？」

「肉系です でも人なら、コムイ、千年公です」

「イノセンスは？」

「炎乱という槍型のもんです」

「イノセンスの能力は？」

「秘密です、でもほっときゃ出てくるでしょ」

「メモリーの名前は？」

「知りません」

「誕生日は？」

「7月10日」

「血液型は？」

「O型です」

「では、最後に風斬レンさん！皆さんに挨拶お願いします！」

「え〜っと、これからしばらくの間、よろしくお願いします」

「では」

「「「じゃあね〜」」」

風斬 レンに質問！（後書き）

そろそろレンのキャラを固めていききたいと思います

第1夜〜目覚め〜

side レン

目を開けた時、見たのは真っ白い天井、名前以外何も分からない
生きる理由も、なんでここにいるのかも、何もかも

「ようやく、目覚めたな風斬レン」

「！誰だよ、アンタ…」

私が問うたのは、褐色の肌に額に良く分からない模様をつけた男

「まあ、そういうのはトーゼンだよな オレの名前は

ティキ・

ミックだ」

「あゝレン起きてる〜ティッキーなんでボクに教えてくれないの
さ〜！」

「教えたぞ、ロードお前が聞いて無かっただけじゃないのか？」

「ティッキーのイケズウ〜」

「おやおや、ようやく目覚めたようデスネ？風斬レン？」

なんだ？こいつは？服は貴族とピエロを混ぜたような格好、達磨

のような体型

感想すら浮かばない

「「ジャステビ登場！」」

「今度は、何なんだよ どの時もこいつも…」

あれ？空気が止まった？私なんか言っただかな…今突然入ってきた二人組もフリーズしてる

「ヒビツ、こいつ結構口悪いね」

二人組の金髪の方がそう言った

なるほど、さっき空気を止めたのは私か…うん？なんか異和感があるな

よく見てみると、さっきのティキとかいう奴とかロードって子に残念な二人組…

あと私、全員もしかして、いや、もしかしなくても肌の色一緒？

私の肌ってこんなに浅黒かったけなあ…

「ま、仲良くしようよぉ〜レン〜ボクはロードだよぉ〜」

「なんで、私の名前知ってるの？」

「秘密っ〜」

「デロは、ジャステロ」

「オレはデビットだ」

「二人合わせてジャステビだよ ヒヒッ」

「ああさっきの二人組か」

「二人組じゃねえ！ジャステビだ！」

確か、デビットだっけ？ジャステロとかいう奴より五月蠅いな
…黙らせてやるうか

ま、いつか メンドくさいし

ゴトッ

私は、落ちたものをデビットに渡そうとした、その時そよ風が吹
き それに書いてある

文字、それは

“請求書”

「オイ、何か落ちたぞってコレ…請求書？えっと、ナニナニ蛙の
ひずめ亭 13ギニー、

鳥のはらわた亭 45ギニー、e t s 占めて 86ギニー……
うわー何これ」

「ジャステビたま、また借金つけられたレロ〜?」

かぼちゃがついた傘が、なぜかしゃべる　するとジャステロが口を開く

「穴あき傘にされたくないなら黙ってる　ヒヒッ」

なんなんだろ、こいつらの勢力図…

「茶番が続きまシタガ、本題に入りまシヨウ? 風斬レン?

お前は、我輩の仲間になるつもりはアリマスか??」

「…好きにしろ、どうせ私に選択権は無い様だからね　でも、」

「でも?なんでシヨウ??」

「記憶が戻ったら、私はアンタらをどうするか　分からないよ?」

そういつて　微笑む彼女はまるで悪魔のようだった

「戻ったら”ご自由ニ?　…戻るハズナイデスケドネ?」

千年公が最後に言った言葉は、レンには聞こえていないようだった

「どうせあなたはノアになったのデスカラ? 我輩の仲間になるホカナイノデスヨ?…風斬レン?」

「ノアとやらが何かはともかく、協力してあげるよ…千年公」

今の‘ノア’としての彼女には、
‘エクソシスト’だった頃の面
影すら残ってはいなかった…

第1夜〜目覚め〜（後書き）

レンがノアになりなしたねー

いや〜無計画にもほどがある

第2夜〜亡霊〜

風斬レン 18歳

「マテール？」

「ハイ？先程‘ブローカー’から情報がありマシテネ？」

「何の情報？千年公、もしかしてイノセンス？」

そう問いたのは、藍色の髪のア、レンだ

レンの質問に答えるのは、少し、いやかなり太っている千年伯爵だ

「その通りデスヨ？レン？ 取りに行つてモラエマスカ？？」

「トーゼン！…で、マテールつてどうやって行くの？」

「ゲートを出しマスカラ、少し待つててください？ お〜いティキぽ〜ん？」

「おい、千年公その呼び方やめてくれよ で、ご用は？」

そう言つて闇から顔を出したのは、ティキだ

そして千年公はティキに何か耳打ちした するとティキがレンを呼ぶ

「レン、ちょっと来いよ」

「あいさー」

テイキに連れられレンが来たのは、膨大な武器が保管されている
部屋だ

部屋を見回すと、銃に剣、弓など様々な武器がある

「確か、コレだっけな」

テイキは、全長140?は軽くあるだろう桐箱をもってきた

すぐさまレンは、テイキに問う

「テイキ、何これ？」

「開ければわかる」

そして、レンは桐箱を開け、その青い瞳には困惑の色が宿る

「おい、テイキ、なんでイノセンスがココにある？」

レンが開いた桐箱の中身は、レンが、エクソシストだった頃の武器
器だった

だが、今の彼女はそれを知らない、いや知るはずがない

重くなった空気を何とかしようとしてイキはとりあえず口を開いた

「これは、お前がノアになる前に使っていた武器だ。名前は知らんが」

ノアになる前なんて、ないだろ、そう言わんばかりの疑いの目

「いいから持っとけて」

そう、強引にレンにイノセンスを渡すと

「さ、あんま千年公を待たしてやんなよ」

「…了解」

「千年公、終わったぞ」

「遅いデスヨ？もうゲートは開いてマス？レン、準備はいいデスカ？？」

さっきの暗い顔は、ドコへやら楽しそうな表情のレンがいた

「あいさ、準備完了だぜ、千年公」

「では、行ってきてクダサイ？マテールへ？」

「行ってきまーす」

ゲートの光の中に彼女の姿は見えなくなった

同時刻

マテールへはアレン・ウォーカー、神田ユウの2名のエクソシストが
向かっていた

第2夜〜亡霊〜（後書き）

そろそろ原作介入します！

土日は、UPできませんので、
あしからず

第3夜〜マテール2〜

「INマテール！」

まるで、長い時間探していたかのような大声をあげるレン

だが、彼女がココに着くまでの所有時間は約2分だ

「…さて、イノセンスはどこかな…？」

そういう彼女の笑みは狂気に満ちていた

同時刻南イタリア マテールの地

「よし 結界に捕えたぞ…！」

「死んでも出すな…！！」

約3体のアクマが結界装置で捕えられていた

「これで、しばらくは時間が稼げますね隊長」

「……どうかなこの数の結界装置で足りるかどうか」

息も絶え絶え隊長と呼ばれた者が、重い口を開く

「中央の奴の姿を見る…あれはだいぶ人間を殺してやがる」

ドン！

「！！！」

隊長の隣のファインダーがアクマに頭を撃ち抜かれたのだ

（ヒヤヒヤ！ヒヤヒヤヒヤヒヤ！！）

（私はアクマ！！！！）

ボコボコボコと結界が膨張していく

それを見た隊長は、大声を張り上げる

「ヤバイ…退避しろ！ こいつ 進化するぞ！！！！」

するとその場に緊張感が走る

（私はアクマ）

（ダークマターから生まれた新たな自我！！）

（育んでくれて どうもありがとう…）

そして、結界が破られピエロのようなアクマが顔を晒した

「レベルアップだー」

都市にファインダー部隊の絶望の声が響いた

「ねえ、千年公イノセンスってどんな形してんの？」

そうデスネエ？デハこんな話をしまシヨウ？

千年公がした話はこの様なものだった

‘古代都市マテール’には、亡霊が出るという

亡霊の正体は、かつてのマテールの住人

町を捨て移住していった仲間達を怨み

その顔は恐ろしく醜やか

孤独を癒すため 町に近づいた子供を引きずり込む

「つまり、何型だよ千年公」

まるで、わかりずれエ、そう言わんばかりの表情だ

おそらく、人型でシヨウ？

ちっ、とレンは舌打ちすると無線を切った

『ファインダーあたりに聞くとするか…』

そして、先程絶叫が聞こえたところへ向かう

「…！」

鼻につく異臭、あたりにあるのは、赤

おそらく全てファインダーのものだろう

体が残っている者がいないわけではない、

残っている者もほとんどが原型を留めていなかったのだ

すると、他の場所からミサイルの轟音が響いてくる

「おっ？イノセンス見つかったのかな？」

ニヤツと笑うと音がしている場所にレンは突っ込んでいった

「どンドン撃ってー」

先程、レベル2となったアクマが指揮をとっているようだ

2のしたから うつつと人間のうめき声がある

「この 人間め」

ぐに、2はファインダーの頭を踏んでいた

「装置ごと人形を結界に閉じ込めるなんて考えたね

こりゃ時間かかりそうだ」

すると死にかけのファインダーは2に向かって息も絶え絶え言った

「イゝイゝ ノゼンズはお前らアクマになんか渡さない……っ」

2はファインダーの頭をぐつと踏む

「ギャアア」

ブシュ、ファインダーの頭から血が吹き出る

「ヒマ潰しにお前の頭で遊んでやる」

「やめろ！」

白髪のエクソシストが無謀にも2に突っ込んでいった

結界のなかの人形も驚いているようだ

そのとき不意に声がした

「イノセンス発見！…エクソシスト？」

ラッキー、と呟くと

「おい、2そいつ私に譲ってくれない？楽しそうだからさ」

「っ…ノア様、わかりました…」

「お前はイノセンス追えよ？追わなかったらお前

消すよ？」

冷たい冷酷な声でレベル2に言い放つと

白髪のエクソシストに向きなおした

そして、レンは楽しそうに笑うと白髪のエクソシストに告げた

「つぎの相手は私だよ 白髪のエクソシストくん」

第3夜「マテール」(後書き)

今回はVSアレン君です

相変わらずの駄文お許しください

第4夜〜マテール3〜

「次の相手は私だよ 白髪のエクソシストくん」

につこりと笑顔のレン、だが、アレンの顔つきは厳しい

(なんで、彼女を見てアクマは脅えた?)

アレンの疑問は当然のものだ、

レンがアクマよりレベルの高い存在ということ

ましてや、ノアと言う存在がいる、その事実すら知らないのだから…

そして、レンは笑顔のままアレンに聞いた

「私の名は、風斬レンだよ あんたの名は？」

疑問を持ちながらもアレンは問いに答える

「僕の名前はアレン・ウォーカーです」

「そっかー覚えとくよ、アレン・ウォーカーでも私と戦って死ななかつたら、ね」

レンは“エクソシスト”だった頃のイノセンス

‘炎乱’を取り出す そして

「イノセンス発動 炎乱」

レンがイノセンスを発動させたことにより、

アレン・ウォーカーの疑問はまた増える

(この人、適合者!? あんなイノセンス教団で見たことがない!)

「なあ、アレン・ウォーカーよそ見してると

死んじゃうよ?」

気付いたら目の前まで来ているレン

「バイバイ 炎乱一陣目炎斬」

「!はやつ」

ドガァン!

「なーんだ、弱いんだね、エクソシストって」

ハア、と退屈そうな溜息を一つ

「僕は、まだ死んでませんよ? レンさん」

肩で息をしているが、傷一つアレンにはない

（危なかった…僕のイノセンスが発動していなかったら

僕はきつと死んでいた…！）

確かにレンのスピードは恐るべき速さだ

あの速さは常人にはない 当然アクマにも

「あんた、アレンだっけ？ 確か、アクマの魂が見える奴…

私ら、あんたの情報少し持ってるんだ

ま、千年公に聞いた程度のもものだけだ」

「そういう貴女はどうなんですか？レンさんあの速さといい、

そのイノセンスといい

貴女のほうこそ何かあるんじゃないんですか」

追及的なアレンにレンは一言だけ言った

「私は、千年公の仲間っていうか味方、ってとこかな？

これ以上は教えられないよ…ありゃ？地震？」

先程からグラグラしていたのだが、

両者共に気付かなかった様だ

「じりゃ、やばいかも…」

「んぞでじょ…」

ビキビキビキ……ゴシヤッ!

「きゃー……!」

二人の声は地下へと消えていった…

第4夜〜マテール3〜（後書き）

しまった…

神田の存在を忘れていた…

どーしよ

第5夜〜マテール4〜

「「ぎゃーー！」「」

ドシヤッ！

静けさをたたえていたマテールの地下道

だが、レンとアレンが落下したことにより、

静けさは一瞬にして、消えうせる

すると、突然ガラガラとガレキが浮き上がった

「痛っっ」

先に起き上ったのはレンのようだ

片手にガレキを持っているのでかなり不自然だ

そして、もうひとつ不自然な所がある それは

落ちてきたときの傷がひとつ残らず回復していること

だが、レンにとっては何もかもがどうでも良いのだ

記憶を取り戻せれば、それで…

ふいに、レンの隣の巨石がこれまた巨大な手が持ち上げる

「…っ…ここは？」

どつやら、アレンは生きていたようだ

体中が痛むのだろう、立ち上がるのもままならないようだ

「立てるか？アレン？」

挑発的にレンが言うと、自力で立ち上がる

「馬鹿にしないでください、レンさん」

「ああ〜ワリィ、ちょっとした癖でさ」

ハハッとレンが楽しそうに笑う、

つられてアレンも笑いそうになるだが、

アレンは、レンが自らの、そして教団の敵であることを

思い出し、そして険しい顔つきになる

レンが表情の変化に気づかないはずがない

一度間合いを取ると

「かかってこいよ、アレン・ウォーカー！」

（長引かせては面倒だね…、ちゃっちゃんと済ますか…）

と、レンは炎乱を構えた

「では、行きますよっ！」

アレンはレンに無謀にも突っ込んでいった

ガギーン！

ギーン！

ズガアン！！！！

激しい戦いの中、レンは余裕の笑みを浮かべている

だが、対するアレンの表情は苦しそうだ

そんな中、アレンはギリギリで攻撃をかわしながら

レンに聞いた

「レンさん！」

「？」

「あなたはッッ！」

ギーン！

レンは、アレンの首筋に、槍の先端を突き付けた

「何さ？私に聞きたいことでも？」

「ええ、僕には不自然に映るんですよ…」

なんで、アクマと人間が一緒に行動するんですか？」

「なにかと思えばそんなことかよ、答えは単純だ

アクマは私らの兵器だから、それが答えよ」

「兵器だって！？何言ってる…」

レンは突き付けた炎乱を強く押し、アレンに告げた

「兵器は人が人を殺すものだ お前のイノセンスも兵器でしょ？」

そう告げたレンの声は、驚くほどに冷徹で殺意がこもっていた

レンが続ける、

「それに、 私には千年公が何しようが関係ない

私の目的に関係があること以外にはね」

「あなたの目的とはなんです？」

ギョッ

2がタイムのしっぽを右手でつかむとぶらぶらんとぶら下げる

「へへへへ！お前も殺す！！えいや！」

ぐしゃっ、2はタイムをチョップで破壊すると

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

愉しそうに笑うのだった

その声がマテールの地下通路まで聞こえているとも知らずに

突然2の脳内に自分より格上のノア、レンの音が響く

（おい、お前イノセンスを追わなかったら、消す」と

言ったよね？

さっさと追えよ…役立たずが…）

レンの言葉が終っても2はしばらく硬直していた

だが、レンの「消す」その言葉に威圧されたわけではない

2はレンの存在自体に恐怖しているのだ

レンが、ノアが言ったことは実行しないと消される

2の頭の中はそのことではいっばいだった

だれでも、上の者は恐ろしいだろう？それと同じだ

(ノア様の命令は絶対！果たさなかったら私が消される！

せっかくここまで進化したのに消されるのはごめんだ)

と、思うとイノセンスを追うのに絶好の相手を見つける

(こいつなら、姿を写してもバレない…ヒヤヒヤヒヤ！)

第5夜〜マテール4〜（後書き）

全然進みませんねー

只今原作で2刊目です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570z/>

THE LAST MEMORY ~ 第0使徒風斬レン ~

2011年12月14日17時52分発行